

交友待客之道

北基行 訳

浙江省紹興市 紹興飯店

賓客接待の礼儀作法

中国人は客好きだ。友達付き合いも大切にしている。解放後、世界各地から来られるお客様に真心を以てお迎えしている人々をあちこちで見かける。来客が増えると、気づかない所で行き届きな点もまま起こるであろう。礼を失しても、実状を理解してもらえば、許していただけるだろう、場合によっては許してもらえないこともある。だから、賓客接待を任務とする皆さんは、接待に当たって、実状と真情をよく理解し、そこをお客さまに十分伝える能力を鍛えねばならない。国には古来より賓客接待の豊富な経験がある、それらを吸収して、業務の質を向上させていただきたい。

賓客接待の経験談としては、古いところは、まず春秋戦国時代までさかのぼる。当時は賓客の往来が頻繁にあったので、諸子百家の多くの士は、交友待客の道、即ち接客の礼儀作法についてなんらかの意見を述べている。時代が下がると、外交活動が活発となり、中央アジアから東南アジア、アフリカ等の国々に広がった。人々は過去の賓客接待の作法を、外交活動にも適用し、不断に発展させ内容がどんどんふくらんでいった。誰かこれに興味がある人があれば、この方面の資料を纏めたならば、きっと

面白い一冊になると思う。

古人の賓客接待の作法は現在の我々のものと比較し難いが、古代においてもそれなりの道理があり、現在でも参考にする価値があるだろう。例えば孔子は『易』『繫辭傳』のなかで、次のように述べている。“上と交り諂はず、下と交り瀆らず”。この言葉は古代の人々の賓客接待における重要な原則といえる。ここでいう、諂（へつら）わず、瀆（あなど）ら

ずとは、卑屈になるな、反対に傲慢になってもいけないという意味である。

『礼記』の中にも次のような同じ記述がある。“人に足るを失せず、人に色を失せず、人に口を失せず。”この文も諂いと侮りを関連付けて解釈を加えている。失足、失色、失口とはすなわち、行動、態度、言論の三面に於ける過失を指しており、とりまおさず賓客接待における三大忌事である。過ちの多くは、行動、態度、言論から出るので、客人の扱いを誤ったとか、傲慢な態度で接したとか、返答において信を失する事態が生じたならば、これらの過ちに気付いた時点で、直ちに進んで友達、客人に申し出て、遺憾の意を表明するべきである。

明朝の永楽年間に薛瑄という一流学者がいた。彼の著書、『讀書録』の中で賓客接待について多くのことを語っている。その中で注目に値する言葉は、“虚心に人と接すれば、則ち人に忤（さから）うこと無し。自滿者は是に反す。”これは虚心をお客接待の基本態度とすると述べたもので、見事に一語で要点を喝破するものである。ときどき見かける接客態度の悪い職員は、虚心でないことがその原因である。相手の弱点を見つけたら、ここぞとばかりそれを目掛けて攻撃し、ほかへの配慮が吹っ飛んでしまう。このような欠点が目にあまるから、薛瑄が主張することは、“人 及ばざる者有れども、己の能を以て之を病（はづかし）むべからず”と述べているのだ。これは重要なポイントであり、ここをよく考えてほしい。なかんずく運動競技に於いて、虚心な態度で臨み、決して己が一番だと思ってはならない、これは重要なことである。

ところが、“己より弱い者”に対しては、団結しやすく、己より強い者に対しては虚心に団結することがかなわない。古人もこんな経験があったのだ。宋代、嶺南の大学者何坦はその著書、『西疇常言』で次のように述べている。“朋友と交わるに必ず己に勝る者を選び、講貫切磋すれば、益なり”。これは、己より優れた友を択べ、そうすれば己に有益であり、多くを学ぶことが出来て、有益である、と教えている。国際スポーツに参加する諸君は、どうかこの意味を噛みしめて味わっていただきたい。

昨今、世界の国々から北京に友達が集まり来ている。外国の賓客と一つの輪になれば、唐朝の王勃が描写した『滕王閣序』の情景が脳裏で重なりあって、まさに“勝友如雲”（勝れた友が雲の様に集まる）“高朋滿座”（高名な友で座席は満杯）を髣髴とさせ、興奮さえ覚えるのである。ただいま、お客とホストの関係は、歴史上如何なる時代にも比べることが出来ない、優れた関係にある。それを説明する言葉として、我々は社会主義の中国首都に足を措いている、この一語で足る。



北京ダック

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

「交友待客之道」ひとそえ

この文章で言うところの客とは、外国から中国首都への来訪者であります。

「許多国際朋友来到北京」とありますが、1960年代以前に比べれば「許多」であっても限定的な人数でした。行動範囲も限定的、期間も限定的そして大多数の来訪者が「親中派」という意味でも限定的でした。

1971年春の初めての中国、到る処で「熱烈歓迎日本朋友」の横断幕と歓声が迎えてくれました。接待係の役人達は「今の中国に来てくれている人は、中国政府から招待されている中国の友人であります」と異口同音に一括りでした。

1980年から10年間、毎年春と秋の広州交易会に参加した時は、胸に「外賓」と書かれた小さなリボンの着用が必須でした。この外国人は政府が認めた賓客であるから、安全第一・丁寧に対応・トラブルを回避、そして友好裡に帰って貰うべしというお達し（或いはおもてなし）がリボンに象徴されていました。一度リボンを紛失したときには非常に厳しい注意を受けたので、その重要性を改めて知らされ、「外賓」疎外意識が強くなりました。

広州から設定されたばかりの「開放都市」の上海や青島へ移動するときにも、パスポート以外に国内旅行証の取得が必須の時代でした。いわば一種のバブル方式であり、漏れの少ないシステムの中で接触できる接待役の中国人は限定的でした。それらの人たちが虚心だったかどうかの記憶はありません。

井上邦久



北京 人民大会堂

交友待客之道 原文

我们中国人是最好客、最爱交朋友的。解放后的我国人民，更是满腔热情地经常接待着来自世界各地的宾客。因为接待的人多了，有时也难免有不够周到的地方。对于某些礼貌不周之处，多数朋友知道真情，当然可以谅解；有的也可能不会谅解。所以，做接待工作的同志们，应该很好地体会并且善于表达我们待客的真情实意，吸收古来丰富的交友待客的经验，把接待工作做好。

谈到接待宾客的经验，首先应该提到春秋战国时代。那时候，宾客往来很多，因此，诸子百家差不多都谈到交友待客之道。后来各个朝代的外交活动，扩大到中亚、东南亚和非洲的许多国家，人们又把过去交友待客之道，运用到外交活动上去，并且不断丰富和发展了它的内容。如果有人把这一方面的材料收集起来，一定可以编出一部好书。

古人交友待客虽然与我们现在完全不能相比，但是他们也有一些道理仍然值得参考。例如，孔子在《易》《系辞传》中说，“上交不谄，下交不渎”，这也可以当做古代人交友待客的一条重要原则。所谓不谄不渎的意思，也就是说，既不要低声下气，又不要高傲怠慢。

同样，《礼记》中说，“不失足于人，不失色于人，不失口于人。”这也是可以同不谄不渎联系起来做解释。失足、失色、失口实际上就是指的行动、态度、言论上的错误，这是交友待客之大忌。一切错误也总不外乎行动、态度、言论这三个方面的。而一旦对待朋友和客人做了不正确的行为，或者态度傲慢，或者答应的事情失信了，诸如此类的错误有所发觉，就应该主动地向朋友和客人声明纠正，表示歉意。

明朝永乐年间有一位学者，名叫薛瑄，在他的《读书录》中讲了许多接待宾客的道理。有一点特别值得重视。他说：“虚心接人，则于人无忤；自满者反是。”这是把虚心看做交友待客的根本态度，真可谓一语中的，抓住了要害。我们看到有一些人接待宾客态度不好，根本原因就在于他不虚心。如果遇到对方有弱点，就更加盛气凌人，目空余子。针对这种毛病，所以薛瑄还主张，“人有不及者，不可以己能病之”。这是十分重要的话，应该引起人们的深思。尤其是在运动竞赛等场合，要提倡虚心的态度，决不要自以能，这是非常重要的。

但是，有的人对于“不及者”倒还可以团结，而对于比自己强的人却不能虚心团结。古人也有这个经验。宋代岭南的学者何坦，写了《西疇常言》一书，他主张“交朋必择胜己者，讲贯切磋，益也”。这就是说，要欢迎朋友比自己强，这对自己有好处，因为可以向他学习，提高自己。目前参加国际运动竞赛的同志们，应该好好体会这个意思。

现在有许多国际朋友来到北京，当我们和外宾在一起的时候，正如唐朝的王勃在《滕王阁序》里所描写的那种情景，真是“胜友如云”“高朋满座”，叫人兴奋得很。我们主客之间的关系，更是历史上任何时代所不能比拟的，因为我们是社会主义的中国首都，这就足以说明一切问题了。